

【銀賞】

『届け！ぴかぴか新米』

日南市立東郷小中学校 8年 濱川 媛名

今年のお盆、新米でたいた、ぴかぴかのご飯を仏壇にお供えしました。

お仏壇に眠る私の曾祖父は、七十四年前に東京から一二〇〇キロも離れた「硫黄島」という島で亡くなっているそうです。

私が戦争のことについて少し関心を持ったのは、六年生のころに家族でハワイの真珠湾に行つて戦争の歴史の戦艦や写真、記録映像などを見てからです。アメリカ人の方がとても親切にくわしく説明してくれました。その後に、戦争に行つた曾祖父の話を知りました。

今から三十年くらい前、戦争で亡くなった人たちの遺骨収集に行つた人たちが、地下六メートルの穴の中らご飯をたくはんごうを見つけてくれました。そのはんごうに刻まれている名前から、その「はんごう」が曾祖父のだと分かり、戦争が終わつて数十年たつてから家族のところに戻つてきたと話してくれました。父はようやく戻つてきた「はんごう」を見たとき、機関銃の弾がかん通した穴の跡があつて怖くなつた事をはつきり覚えていたと言っていました。その帰つてきた「はんごう」は、お骨の代わりに埋葬したそうです。

今の私たちは、お腹がすいた時にいつでも好きな物を食べることができません。コンビニなども近くにあつて二十四時間、食べ物に困ることのない生活を送つていて、それがむしろ当たり前感覚になつています。

でも、戦争をしていたころは、食べ物がなく、不自由で、栄養失調や餓死で亡くなつていた人がたくさんいた話も母から聞き、ご飯を食べない状態を想像して苦しくなりました。

戦争で、日本から遠い場所に行つた兵隊さんたちは、みんなが食べれることのできるお米があつたのかなと思ひました。お腹がすいて、つらく大変ではなかつたのかなと思つたと絶対に戦争をくり返してはいけなないと改めて強く思ひました。

私の家の周りには、たくさんのお田んぼが広がつています。私は、小さい頃からおじと一緒にトラクターに乗つて、田んぼを耕し、苗を植え、稲刈りの作業をくり返しています。田が夏にかけて緑から黄金へと変わつていく景色は毎年、感動的です。

稲刈りをするときは、とても暑くて、モミやワラくずが体につくと、とてもちくちくしていやだけれど、ふくろの中に入ったもみが、玄米から白米に変わつていくと、稲刈りの苦勞をなぜか忘れてしまいます。

私の家は、ご飯をたく時に、「土鍋のかま」でたきます。私が生まれる前からずつと使つていふるそうです。その古いかまを使つてお米をたくとおいしいからと言つて母がずつと使つていふす。たき上がった新米は、一粒一粒がとてもキラキラして生きているようです。

私は妹とまつ先にそのいきいきした新米ごはんを「おいしい新米ができたので、食べて下さい。」と、仏壇にお供えしました。曾祖父が「ありがとう。おいしいよ。」と、言つて喜んでくれているように感じました。実際に聞いていない曾祖父の声が聞こえたように思ひました。

それから、家族みんなでお米をいただきました。ねばりがあつていつもよりもおいしい味がしました。

みんなを喜ばせてくれる、このキラキラと輝いた新米を、来年もたくさん手伝いをして、これからもお供えしていきたいです。